

王女と猫の話

— カレル・チャペック —

八八

二

さてその猫の名前はスーザンといひましたネ。ミところが王女様はプシーださか、ティビーださか、タフィーださか、キティーださか、フラッフださか、トプシーださか、ブラッキードさか、ダーキーださか、その他^{ほか}それはくゝいろいろな名前をつけてお呼びになりました。なにしろこの猫が第一のお氣に入りだつたのですもの。王女様が朝お目覺めになるご、もう小猫は王女様の羽根蒲團の上に、まアるくなつて、ほんごに何か仔細らしく咽喉をゴロ／＼鳴らして居ります。それから一緒に顔を御洗ひになつて——エ、王女様より勿論猫の方がすみ丁寧ですごも、ほんの前足ミ舌を使ふだけですすれごも。そして王女様が一日中いろんな御

東京女子高等師範學校教授 中野好夫 譯
惡戯^{いた}をなすつてすつかり眞黒におなりになつても、スーザンはいつでも綺麗な顔をしてすましておりました。

でもスーザンはやつぱり猫は猫でありました。たゞ他の猫達には出来ない、王様の冠の上でまアるくなつてお晝寝をしたり致しますが、そんな時には、スーザンはウト／＼しながら、私の遠縁の獅子伯父さんは恐い獸の王様よ、なんてそんなごを思つてゐたかもしれませぬ。イエ／＼、そうぢやありませんでした、丁度その時一匹の鼠が穴から顔を出しましたが、スーザンはそれを見つけるが早いか、ピヨイミ一跳びに鼠をつかまへて、丁度その時は牛憎王様は廷臣達を御集めになつて、大變難かしい御相談の最中ださいふのに、さも鼻高々ミ王座の前に捕へた鼠を持つて參

りました。

丁度王様は今二人の家來の言争ひに裁きをおつけになるさいふさころでした。なにしろ二人とも自分の方が正しいと信じてゐるのですから王座の前に對ひ合つて、お互に怖しい權幕で言争つて居りました、丁度口論が絶頂になつて時でありました、スーザンは二人の間に鼠を置く、サア賞めていたゞきたいものです、いはないばかりの顔付で二人を順々に見ました。一方の家來は猫なきには目もくれませんでしたが、今一人の方はすぐに片手を伸してやさしくスーザンの顔を撫でゝやりました。『成程』王様はお首肯うなづきになりました。『こちらの男が正しいのに違ひない、あの男は人の手柄をチャンと見て、ねぎらつてやることを知つてゐるやうだ』。そして間もなく果してその通りであつたことがはつきり判りました。

王様は御殿に二匹の犬を飼つておられました。一つはバフォー君、今一つはバフィーノ君と申しました。初めてスーザンがお部屋の敷居から顔を出しました時、二匹の犬はまるで『見ろ、さうも俺達の仲間ぢやないぞッ』と言つたや

うな顔付で、お互に顔を見合せました。そして言ひ合せたやうにスーザンの方へこんで参りました。スーザンは一寸壁の方へ退つて、尻尾の毛をまるで箒の様に逆立てました。もしもバフォー君とバフィーノ君が少し利口な犬だつたら、猫が尻尾の毛を逆立てるのは何んな時だか、ちやんこ知つてたでせうね。ところが二匹ともあんまり利口な犬ではありませんでした。そこでクンクン鼻をならしてスーザンの身體中を嗅ぎにかゝりました。第一番にバフォー君が出て参りました。がアツと思ふ間もなく鼻の頭をイヤさいふ程引搔かれて、キャン／＼鳴きながら、バフォー君は尻尾を巻いて一目散に馳け出しました。恐ろしく馳け出したもので、まる一時間さいふものはさうしても止まりませんでした、そして十日間さいふものは恐くて恐くて慄えが止まりませんでした。

バフィーノ君はそれを見るに、一寸ビクリ致しましたが、こんな時でも弱身を見せてなるものかと思ひましたので、『ヤイ、このお化け、ふざけた真似をするに承知しないぞ。俺はな、途方もない大聲で吠えることも出来るんだ、

お月様だつてブル／＼慄え出さうてんだぞ。そしてこの通りだこいはんばかりに、バフィーノ君は力一杯に吠え立てましたので、まるで四邊^{あたり}一面何里四方の間は窻ガラスが大きな音をたてゝみんな壊れてしまひましたよ。

でもスーザンは眼の色一つ變へませんでした。そしていだけバフィーノ君に吠えさせておいて申しました。『成程ね、あんた一寸吠え方を知つてるわね。だけぎ私が一度フーッつて唸つて御覽。蛇でさへ恐がつてブル／＼慄え上るんだよ。』そう言つてスーザンは思ひ切り恐ろしい勢でフーッミ一唸り致しました。でバフィーノ君の背中の毛は一本残らず逆立つたほごでありました。

でも今度は自分の番にあるミバフィーノ君も負けずに申しました。『うん成程、相當なもんだネ。だが僕の馳けるのを一つ見せてやらう。』そしてスーザンが面喰つてゐる間に、バフィーノは獨樂のやうな勢で、まるで大きな御殿がグル／＼廻り出すほご馳け出しました。

スーザンもこれにはビックリしましたが、そこは何食はぬ顔をして、『成程ね、あんたの早く走るこゝはそれでよく

判つたわ。でも私はね、あんたより百倍も強い奴がやつて來ても、こうして逃げるんだよ、ホラ』。そして一ツ、二ツ、三ツ、三跳びするこもうそこにあつた高い／＼木の天邊まで馳け上つてゐました。バフィーノ君は仰向いて見るだけでもうクラ／＼眼が眩むばかりでした。

でもやつこ氣を取直して申しました。『だがね、犬らしい犬はそんな木登りの眞似なんぞしないんだよ。まあ、僕のあるこゝを見てるがい。僕の鼻は恐ろしく利くんだぜ。』

丁度今お隣の國の女王様がお晝の御馳走に鳩を焼いておられるんだ、そして僕等の明日の御晝の御馳走は鷲鳥の焼肉だぜ、へん、チャーンスこの鼻で判るんだ、スーザンも負けずにクン／＼鼻を鳴らしてみましたが、勿論何の香もありませんでした。犬の鼻さいふものは恐ろしいものだミスーザンも内心驚きましたが、そこは負けてゐないで、『相當なものね。だけぎ私達の耳に比べたらそんなこゝなんでもないわ。ホラネ、今私達の女王様か床の上に縫針をお落しになつたわ、それからお隣の國ではもう十五分ばかりするミお晝の鐘を鳴らすこゝろだわ、チャーンスこの耳に聞え

てくるのよ』。

これもまたバフィーノ君を驚かせましたが、こゝで負けてはならないと、『うん、成程、成程、だがね——そうだ、そうだ、僕達はもう喧嘩するのはよそうぢやないか。何にも恐がるこゝちはないから、降りておいでよ』。

するミスーザンは申しました。『勿論あんたなんぞちつとも恐くないわよ。でもね、そうだわ。あんたこそ私を恐がらなくてもいいわ。だからこゝまで登つてらつしやいよ』。

『ちや直ぐ登つて行くぜ』、バフィーノ君は申しました。

『だが僕が登つてゆく前に、友達交際の挨拶だ、犬のやうに尻尾を振つてもらひたいネ』。そう云つて、バフィーノ君は風を切つてブン／＼鳴るほゞ尻尾を激しく振りました。

スーザンも負けずに一生懸命に振つてみましたが、一向うまく動きません。それもその筈でした。神様は犬にだけお教へになつたのですもの。でもスーザンは恐がつて降りなかつたと言はれては面目に關はるこゝですから、木をかけ降りてバフィーノ君側へ参りました。『私達がネ、仲好しになつた時には、こんな風に咽喉を鳴らすものよ。あんた

もお友達だから、してくれるわね』。

そこでバフィーノ君は咽喉をゴロ／＼鳴らしてみました。情ないこゝに自分でも恥しくなるやうな變な唸り聲が出て来るばかりでありました。『サア、君おいでよ。門の所へ行つて人間共に吠えつくんだ、さても面白いぜ』。

『でも私そんなこゝよく出来ないわ』。スーザンはそう靜かに申しました。『でもあんたさへ構はなきや、私と一緒に行つて煉瓦の上からいろんなもの見物しないこゝぞ？』。

『すまないけごもネ』、今度はバフィーノ君が閉口して申しました。『僕、さうも高い所へ上るに、頭がフラ／＼するんだよ。それよりも一緒に兎を追馳けに行くのはさう？一番よかない？』

『兎ですつて』、スーザンは申しました。『そうね、私兎なんぞ捕へられないわ、足が短いんですもの。だけごも、さう／＼、あんたさへ一緒に来てくれるんなら、小鳥が澤山捕へられる樹を教へてあげてもいいわ』。

バフィーノ君はすつかり閉口して、考へこんでしまひました。がやがて大聲で、『ネ、スーザン、僕等、こんなにし

ててもつまらないぞ。いゝかい。僕はやつぱり森の中だつて、街の中だつて、犬は犬なんだ。そして君は木の上だらうが、屋根の上だらうが、猫はやつぱり猫なんだよ。でも

ネ、この御殿ぢやネ、そしてこのお庭ぢやネ、僕等は犬でもない、猫でもない、たゞのお友達にならうぢやないか。』

まあそんな譯で、二人は大の犬の仲好しになりました。

お互に眞似っこをして、スーザンは王女様の跡を小犬のやうに追馳けてみたり、バフィーノ君はバフィーノ君で、スーザンが鼠を捕へて王様の足下に持つて来るのを見るに、自分も塵埃箱や往來から汚い骨の切端なごをくはえて来て、さも得意そうに王様の前をかけまはりました。勿論スーザンの場合と違つて、バフィーノ君には何のお褒めの言葉も御座いませんでした。

一度、大變闇いある晩の事でありました。バフィーノ君は犬小屋で眠つて、皆さん、勿論王様の犬ですから、西洋杉ミマホガニーでこさへた立派な犬小屋でした——夢を見て居りました。なんでも一匹の兎を一生懸命に追ひまはしてゐるに、何だか軽くバフィーノ君の鼻の先をなでるもの

があります。『オヤッ』バフィーノは夢から覺めて跳び上りました。『誰れだッ!!』

『シッ!!』聞覚えのある聲がしました。『靜かにしてるのよ。見るにそれはスーザンでありました。暗闇の中にスーザンの身體は漆のやうに眞黒でありましたが、蒼い眼ばかり唯ならぬ様子でギラ／＼と輝いて居りました。そしてそれは／＼小聲で申しました。』私ね、今お屋根の上に坐つてネ、いつものやうにいろんなごを考へてたの、するにネ、私の耳にサ、——ホラ、妾の耳までもよく聞えるの、知つてるでせう——ゾー／＼ゾー／＼お庭の端の方で何だか人の足音みたいなのが聞えて来るぢやないの。』

『フム』バフィーノ君は思はず乗り出しました。

『靜かによ。』ミスーザンは小聲で叱つて、『ネ、私きつゝ泥棒だと思ふわ、ネ、一緒に行つて捕へないごき?』

『ワン、ワン、ワン、勿論だ!!』バフィーノ君はもうすつかり有頂天になつて叫びました。そして二人はまつしぐらにさび出して、お庭の中へ忍びこみました。

外は眞暗闇で、バフィーノ君は先に立つて走らうと思ふ

のですが、暗さは暗いし、すつかり度を失つて、一足毎に
躓いたり轉んだり、それはそれは大變でありました。『スー
ザン、スーザン、僕は暗くて一寸先も見えないや』。バフィ
ーノは焦れつたそうに申しました。

『私はネ、夜だつて晝と同じに見えるわ。だから私が先
に行つてよ。であんた私の香を嗅いでいらつしやいね』。そ
こでスーザンが先に立つてゆくこゝになりました。

『オヤッ!!』突然バフィーノ君が大聲に叫び出しました。
『誰かの足跡の香がするぞ!!』バフィーノ君は鼻の尖を地面
にピツタリつけて、まるではつきり眼でも見えるやうに、
いつの間にかスーザンを置き去りにして、ドン／＼奥の方
く進んで参りました。

『シツ!!』暫らくする息を凝らしたスーザンの聲が聞え
ました。『ゐたわ、ゐたわ!!そら、あんたの直ぐ前よ』。

『イヨ／＼!!』バフィーノは大聲に叫びました。『ウウウウウ
ーッ!! 出て来い!!ウウウウウ!!おのれ、このルンペンが、
不屈者が、大泥棒が、ウウウウウ、かみついてくれるぞ、
引裂いてくれるぞ、しくはちやにしてくれるぞ!!ウウウ

ワンワンワン!!』

泥棒はそれだけですつかり吃驚仰天して、一目散に逃げ
出しました。バフィーノ君は逃がすものかミ後を追馳けて、
ふくらはぎに食ひつくやら、ゾボンを噛み裂くやら、脚に
跳び上るやら、到頭小股をすくつて引くりかへしてしま
ひ、ガブリミ片方の耳たぶに食ひつきました。それでも泥
棒はやつこ起き上るこ、命から／＼大木の上へ逃げ登りま
した。サア今度はスーザンの番ですネ。泥棒の後から大急
ぎで馳け登るこ、背中に跳びつく、頭を引搔く、首頸をか
きむしる。イヤハヤ散々でありました。

『ワンワンワン!! 噛んぢまへ、殺しちまへ、はり倒してし
まへ、しつかりしろ、逃がすな、ウウウウウワンワン!!』
『ウワ／＼!! 降參だ、降參だ!!』到頭泥棒は泣聲をあげ
て、木の上からバタリミ落ちて、地面にへたく／＼こ坐りこ
んでしまひました。そして両手を高く擧げて、哀れつばい
聲を出して、『ごうか、皆さん、殺さないで下さい、後生で
すから。ホラ、この通り降參してゐます。ご／＼でも貴方
がたのいゝ所へ連れて行つて下さい』。

そこで二人は愈々引擧げにかゝりました。スーザンが先頭に立つて、尻尾をまるでサーベルのやうに真直にピンと立て、その後からは泥棒が兩手を擧げたまゝで、一番後にはバフィーノ君が鼻をビク／＼動かしながら、さも得意さうにやつて参ります。半分ほご歸つてくるに、この騒ぎに眼を覺ました警護の人達が灯を持つてドヤ／＼出て来て、この行列に加はりました。さてこんな風にしてスーザンミバフィーノ君は意氣揚々ミ泥棒をお城へ連れて参りました。王様女王様までお目覺めになつて窓から御覽になつて居られました。たゞ一人女王様だけは何が起らうとちつとも知らないで、朝になつてもスーザンがいつものやうにやさしい顔で、それはまるで夜中に何一つなかつたやうな靜かな様子で、女王様の枕許へやつて来てまあるくならなかつたならば、朝の御飯も忘れてお寢やすみになつてゐらしたでせう。

スーザンはまだ／＼いろんなこきを知つて居りました。でも一々それをお話して居りますに、このお話に限りきがないここになリますから、ほんの一寸だけお話致しませう、スーザンは時々小川へ行つて前足で上手にお魚を捕へまし

た。それから胡瓜のサラダが大好きでした。まだそれからいけないに堅く命令いひけられてゐるのですが小鳥を捕るこきが何より大好きで、しかも捕へておいて何食はぬ顔ですましてゐるのがいつもスーザンでした。それから大變遊戯がお上手で、それはそれは一日見てゐても飽きるこきはありませんでした。スーザンのこきをもつこもつこ知りたい人は、さうかざれでもよろしいから他の猫を見てやつて下さい。みんなさこかスーザンに似てゐるのですから、みんなほんきに面白い惡戯を澤山澤山に知つてゐて、皆さんがいぢめたりなんぞさへしなければ、誰れにでも喜んで見せてくれますよ。(つゞく)

雑 録

去る六月二十三日(土)二十四日(日)の兩日東京府女子師範學校附屬小學校幼稚園主催の下に、左記要項のこほり、幼稚園保育に關する研究發表會が開催されました。

主催者側の方々の周到なる御用意、研究發表者、講師の方々の御熱心、梅雨空の蒸し暑さにもめげず堂に溢れるば